

第三課 エンゲルス『空想から科学へ』(第一回)

不破 哲三

〔I〕

一、エンゲルスと『空想から科学へ』

1. 一八七〇〜八〇年代の運動事情。

ドイツの社会主義労働者党(七五年に二つの党の合同)と

『反デューリング論』(七七年一月〜七八年七月)。

フランス労働党(七九年創立)と

『空想から科学へ』(八〇年)。

2. 日本での紹介。一九〇六年(明治39)。堺利彦の翻訳で雑誌『社会主義研究』に掲載。翻訳に苦勞。「紳士閥」、「平民的革命」。

二、第一章。文章に入る前に、フランス革命について

なぜフランス革命の説明をするか。

☆エンゲルスは、現代の社会主義の源流をフランス革命のなかに求めている。

一七八九年(フランス革命開始)から一八一四・一五年(ウィーン会議)までの二六年間
は、フランスを軸にしたヨーロッパの大激動の時代。

革命の時期は最初の六年間。むしろナポレオン時代の方がずっと長い(九九年〜一五年)。
しかし、ナポレオンの背後にもフランス革命の栄光があった。

☆この革命は、ヨーロッパの歴史のなかでも、マルクス、エンゲルスの革命論の形成の上で
も、特別の意義を持つ。

☆第二課で勉強した史的唯物論の応用問題として、フランス革命を考えたい。

三、フランス革命のあらまし

1. 革命前のフランス社会の土台と上部構造。

封建的生産関係の桎梏化はどこに。

上部構造で革命を準備したのは「啓蒙思想家」たち。

2. 革命の経過。

土台(階級)の動きと上部構造(政治勢力および諸事件)の推移を立体的に見てゆく。

89年5月 「三部会」招集。6月、第三身分の代議員による国民議会。

89年7月14日のバスチーユ襲撃。パリ祭はこの日に。

8月 「人権宣言」。

91年8月 オーストリアとプロイセン、反革命干渉戦争の態勢をとる。

10月 立憲議会。右派政權。

92年。干渉に反撃する革命戦争開始。国民軍の登場。「ラ・マルセイエーズ」。

8月 パリの蜂起。

9月 国民公会。ジロンド党政權。9月22日 共和制成立。

- 12月 第一次対仏大同盟（イギリスも参加）。
- 93年5月 パリの蜂起。ジャコバン党政権。
- 9月 「恐怖政治」始まる。 10月 革命暦。
- 94年7月 テルミドールの反動。執政官政府。
- 99年11月 クーデターでナポレオン専制の統領政府成立。
- 04年5月 ナポレオン帝政。その二面的な性格。
- 反封建革命の成果の擁護。対外的にも反封建的変革を輸出。革命が生み出した国民軍とナポレオンの戦略・戦術の結合。それがフランス軍を「ほとんど無敵にした」（エンゲルス）。
- 12年 ナポレオン、モスクワ遠征で敗退。
- 14年4月 ナポレオン退位。エルバ島に追放。王政復古。
- 15年3月～6月 ナポレオンの100日天下。
3. 革命はフランス社会をどう変化させたか。
4. 現代の革命と比べて、フランス革命の特徴をふりかえる。

〔II〕

段落ごとの要約（予習用のもの）

1. 現代の社会主義とフランス革命。（23ページ）
2. 革命を準備したのは「啓蒙思想家」たちだった。彼等は「正義と理性の国」の実現を目標とした。（23～25ページ）
3. しかし、実現したのは「ブルジョアジーの国」だった。（25～26ページ）
4. フランス革命と諸階級。空想的社会主義者の源流。（26～27ページ）
5. 3人の空想的社会主義者。その思想の共通の特徴——「理性と正義の国」の追求。（27～28ページ）
6. フランス革命における「理性国家」論の挫折のプロセスを見る。（28～31ページ）
7. フランス革命の時代で無産大衆はどういう役割を果たしたか。（31～32ページ）
 - * エンゲルスは後年、「恐怖政治」の時代の評価を変更している。（31～32ページ）
8. 空想的社会主義の潮流が生まれた経済的背景を考える。未成熟な資本主義的生産。（33～34ページ）
9. 現代の社会主義者は、この先輩たちから何を学びとるべきか。（33～34ページ）
- 10～11. サン・シモンの場合。（33～36ページ）
12. フーリエの場合。（36～39ページ）
- 13～17. オウエンの場合。（39～45ページ）
18. 空想家たちの総括的批判。社会主義は空想から科学になる必要があった。（45～46ページ）